

東京大学鹿児島宇宙空間観測所の開所式

下 村 潤 二 朗

昭和 38 年 12 月 9 日 (月) 冬うららかな観測所の計器センタ台地で、鹿児島宇宙空間観測所の開所式が行なわれ、約 260 名の来賓が出席された。さきに、同じ台地で起工式が行なわれ、その間 1 年 10 カ月が経過し、四つの台地の完成と、約 270 坪の建物が完工した。式は、
 式典 11 時 0 分～11 時 30 分
 見学 11 時 30 分～12 時 30 分
 祝宴 12 時 30 分～13 時 30 分

という予定で始められたが、茅東大総長の式辞を初め、生研所長の研究経過報告、各界多数来賓の祝辞等の充実で式典の時間が延長された。けっきょく、祝宴がお開きになったのは、14 時 30 分頃であった。

この式典は、茅東大総長の任期満了数日前の催しであり、ロケット観測を終始育成されてきた総長にとっては、感慨深いものであったと推察する。

翌 12 月 10 日、飛しょう実験を予定した L-2-2 号機



は、11 日に延期し、総長を初め、一部予定された来賓には、見学の機会を失ったが、L-2-2 号機は、11 日、14 時、上下角 78° で発射し、最高々度 410 km に達し、池田総理大臣、灘尾文部大臣から、茅総長宛、長文の祝電が寄せられた。
 (1964 年 8 月 17 日受理)

L-3 型 実 験 の 保 安 に つ い て

下 村 潤 二 朗

L 型ロケットは、すでに 2 型を 2 機、3 型を 1 機飛しょうさせたが、それらのややかたまった例として、L-3 型 1 号機を中心とする保安について、その概要を記録したい。

1. 実験計画概要の作成

屢次の設計会議が終わって性能計算がまとまると、二三の発射角度に基づく、水平飛しょう距離が出る。これと航空路図およびできれば漁場とをにらみ合わせて発射方向 (水平方向) を定める。L-3 型の場合は、メインロケットの落下点が 1,900 km に達し、マリアナ諸島に接近するとみられるので、147° (ほぼ南東方向) を選んだ。この結果を緯経度に表わして実験計画概要に記載する。第 1 図のように、L-3 型の場合は、第 1 段ブースタ、第 2 段ブースタともに、国際航空路より外れている。

1) ロケットの分散度は、L-3 型の場合、中心より左右各 8° とし、K 型の場合より各 2° をせばめたのは、ロケットの性能の安定性からなし得たのであるが、それによってロケット落下区域が小さくなる利点が考えられた。

2) KSC の発射点から海洋をのぞめば、北東に都井岬があり、南に種子島がある。ランチヤの機能上の限界を無視すれば、海上における水平方向の限界は、84° から 160° の間となる。将来、ロケット飛しょう距離がさらに延びた場合、小笠原諸島、マリアナ諸島の島の間隙をねらうことが方向選択の factor となる。

3) ほぼ北緯 30° 線を境にして、東京管制本部と沖縄管制本部との管轄の境界線がある。したがって北緯 30 度以南にロケットが落下する場合は、事前に外務省を通して米軍側へ連絡することになっている。

4) K-8 L 型、K-9 M 型のメインロケットの落下点